



令和になり、一ヶ月が経ちました。勤行中に年月日を「平成」と唱えてしまう事があります。まだ慣れません。早く慣れたいものです。皆様は如何ですか？

御姿

良啓

平成三十一年四月三十日午後五時、私はテレビの前に座り、前天皇陛下（現上皇陛下）が最後のお言葉を述べられる松の間からの生中継を見ていました。モーニングに身を包み、壇上上がった陛下は国民への謝意を伝え、二百二年振りとなる生前退位を希望通り実現されました。

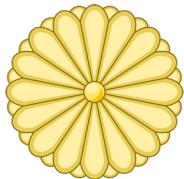
この間約十二分、私は正座し、拝聴しました。陛下のお言葉も素晴らしいと感じましたが、何より、松の間を退出なさる一步手前で振り返り、参列者全員を見回しゆっくりと一礼をする御姿に慈愛に満ちた陛下の御心が表れていると驚嘆しました。

「象徴天皇制」と言う私たち庶民には思いも及ばない日々の中で、責務を全うし、最後にあれほどの見事なお辞儀でその任を終えられた事に、深い敬愛の念を感じました。

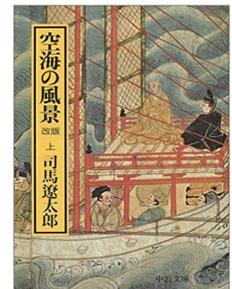
人の価値は身分や出身ではなく、行動により決まると、仏祖釈尊は宣言しました。ですから、釈尊は八十年の生涯を遊説に当てました。必要としている人がいるならば、何があってもそこに赴く。行動する事で社会を変えたいと言う強い信念があった訳です。

上皇陛下も国内海外の戦跡や被災地を多く回られました。避難所では、床に膝を付け、苦しい生活を送られている方々と同じ目線でお話しを最後まで聞いていました。一部の政治家が形だけの慰問に来て、十分程度で帰るのとは大きく違います。

ぜひ、これからは仲睦まじい美智子上皇后陛下と心穏やかに過ごされますことを祈念します。



お寺 Book Review ブックレビュー



【紹介の本】

『空海の風景 上・下』

司馬遼太郎・著

中公文庫 中央公論新社

六八六円＋税

人はいつの時代も天才に憧れる。奈良時代末期、四国・香川の善通寺に生まれた空と海を名前に持つ天才、空海。現代においても、たとえ仏教が身近でなくとも名前は知っていて、なんだかすごい人という存在ではないだろうか。

七七四年六月十五日、奈良時代末期の時代の変わり目に生まれた彼は、宗教家、思想家、文章家（美文で知られる）、詩人、土木事業まで手がけた平安時代に活躍した巨人として、今でも弘法大師、お大師さんと呼ばれる親しまれている。密教こそが優れた仏教だとして、当時最先端だった密教を留学した唐から持ち帰った空海は真言宗を開いた。これまでになかった仏像を生み出し、立体曼荼羅では当時の人々を驚かせた芸術家でもある。また庶民に開かれた初めての教育機関「綜芸種智院（しゅげいしゅちん）」を創設した。

彼の残した偉業にばかり目がいくが、天才もまた一人の人間。空海がいかにして「空海」になったのか。それに応えてくれるのが司馬遼太郎の名著「空海の風景」。空海が生まれ育った土地、時代の風景、空海の周りを取り巻く人、自然の風景、空海が異国の地で目にした風景、そして空海が作り出した風景が、この小説で色鮮やかな曼荼羅のように織り成される。仏教全体について俯瞰でき、仏教の変遷も辿る事のできる良書。

五六〇年の歴史を持つ普天満山神宮寺（一四五九年建立）も真言宗のお寺。弘法大師誕生月の六月には本堂にて大師像を近くで拝むことができる。この機会に空海の人生に思いを馳せてみてはいかがだろうか。

（スタッフ 川端）